



特別  
1A  
600  
107  
早稲田大学図書館





待  
明 曾 4  
第 600  
卷 107

俳風 月西話



序

禮ハ飲人食より申え——先色ハ良シク  
 耳少きを酒ハ嬉——茶ハさびしき  
 飯ハつらもちをきおらや——音ハ昔中少  
 思ハ憂多き刻々——音ハ荒る善思ハ  
 達ハぬ人無きも——ふる月夜ハ人々  
 少シ老井ノ言宣るらう我風歌  
 のくろく人々ハあはれきくくく



け中月首山登りてくは新の歌  
をよきし一 恋ふる人んは花街の  
月の暁をくえとくかふる山登り  
昔一は月北友に一をよは花街の  
昔程中と号も後月ふいざりし  
昔は風を吹かば長子とる人ん  
昔とくは中一は新ふかふし  
深川里の端始ふしかりしとる人ん  
歳云の俳句とて一又雲を月

りは彼ノ里ふもくくかのほり  
る中りしあし一りはふしは  
あしとては河村舎東花街のち  
扱ふ中の中一はふしは  
のこりしはるしとる人か  
るは中りし人か  
顔あしは物一はとる中か  
中りしはとるしとるし  
中りしはとるしとるし











のちかゝくはしるる遠くは江戸の華  
を論し色ハハ永代橋の粧斬を  
みらら自富田御神の地録を  
りおとる文之野んの隆をいふと云ふ人  
物從り詠りともおもひしる詠り論をん  
け地の無心記ふや田んあつと詠り  
計ふんけ橋の胡蝶ふら艶く西條かゝ  
くは極し詠り様とこよ  
あふ深き茶此け地を詠る深川里と

のしあをせしとこり中て何しの地り  
なふ山笑ふ人や老若都鄙と笑ふ  
庭しりくく春次をふゆくも春  
は文を月小服の乃ハ冬感をも深る  
途ふりしをそんもれハりてこの年の秋  
みややん人語の去来をよ東院坊ハ此の  
女湯の丸山小所ハ冬ふれあゝ娼女此  
帯おらおりの十中を雅なふ流るる  
境の賦を詠ハるや俳の好士の端とる







八幡水代寺北瞻浄小年をとまを  
ついでの川袖色こころ力りおまひ  
物ヲ取ま

誰ノ折ねたの恨や古帝苑 藤山  
空路ヲ折ふこころ独り月々  
よふ秋のせし深行々

馬るしおと落る人の中帝苑 赤子  
池の汀ふまをる月

一構小箒奇北の秋又

まろふの流ふ一樓秋の醒るを  
月の中やるしこころ舟のこころ  
松のしを路をるしこころ若州のるし  
赤子船の候の湖小舟人

朝汐や秋白ひる月如後 藤山  
おまひつや 月 赤子  
あふとハ







あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる

あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる

あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる

江戸の月  
江戸の月  
江戸の月  
江戸の月

あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる  
あまのつねにわたりぬる川は、  
さきさき川風の多路をさぐる



入る女帝の紀のこつお秋白ひも湖にやと  
そくかん海を渡合ふいふれつと  
海しやあま大通は舟ををかきし  
一の歌を柱と平る 望月居の居る  
入のひこ世をいそよそくつく色を  
いざうーのうらふさくく知  
るる月日をさつと申らうか  
あんとあまの海と思く後の月  
つるさといふあやかし月ふ人

うらむか

月と新衣の欠くねる

あーさおまのちと申す  
去ぬる海と月未のよいか  
海ひー友のちと申す  
あまのうらふさくく知  
るる月日をさつと申らうか  
あんとあまの海と思く後の月  
つるさといふあやかし月ふ人



かゝるめ

えん智こるめいふや月の鼓 志子

いひけ人えんより四むかゝ風雅の  
おわひおるさふりこる

いざうーいづれいさ 友崎

月おる

友崎の風雅のさ人と号を又いひ  
人ゆんこ長子とりふ替時移り  
船の流川一橋の巻ふさめ

彼ノ遊漸小おれいまの合一 音英

そとこーしつ遠ふり自新小糸

しそを真深く娼婦小 音英

月小己く 音英 長子三弦の

音色はさるふ波りこ一 音英

おるんおわりれゆれ 音英

極く 音英

系ふたの穂小穂小 志子

十一 音英



之味をんのころたるせんや舟の長子

梅妻あやの一句ふは種の舎の才の子のたとと

これハハ廿五月のからあま一夜

東花坊の吹く葉のたらふは縁の足ん

とりひーとときーりー

酒のもゆくちそと花の影や 長子

仲飛も

月とそるあをと撰んと一時ふそ

北へふいひ孫一つ改めそるあり撰

アーとおうー

うれ秋ふ舟のあらはれ 長子

ふらるる

あらとさめくふらのら張出と江入二十

おのの地たらとやーり

ら張とらるる

長子

和ららららら

大さららめ一席中の船の酒酌ふ葉

新け口の酒と長時移らめらるるを



かくとぞふりふ入しぬと交はるるま  
の雅と感と志つりしりしりしり  
にささめりしよみ皆自之

まこころもしるる海深所の

44の記

東

よもくしるるの志と申あはるる

あは深ふら海深るをや

北

いりか

申あはるる

あはるるしるる申あはるる

秋夜のおさもえや燈籠のそと  
ぬれに雪子く一筆を墨をりりとも  
をらとと山に外の花さしりしり  
月の砂をほのぼのしりしり  
しりしりしりしりしりしり  
とんと

いぬや紅船さるる  
しりしりしりしりしりしり  
心と花と草と物と



傘いゝぬ月の河にや色とて 中子

こゝろにやうけしおぼろの河に  
秋風小波中意に振向く

紅胎さよを空に吹流りてく連る  
一かこも秋風をさくしを向くはねと  
物ささるる夏の花佃のあか入際の月  
おれしりあゆをさしさしあはれ  
贈るおしこゝろにやうけしおぼろの河に

鳴字笑ふあやうし 了月入の海舟  
おこか舟しるるう海舟のあか入の誤の  
概中しえし人かきし終る名舟

月のこぼれ川のかやにの舟 中子  
ねうしるるのえつふ二遊者 中子

あとかた人けしと空かこゝろ  
人 中子















